

409

特248

959

時代思想の顯現せる

天理教と大本教

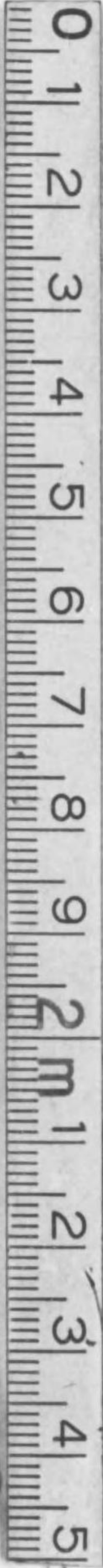
黒龍會主幹

内

田

良

平



始



特248
959

新年の祝詞に代へ閣下並に辱知諸賢の瀏覽に供すべ
く執筆仕候『時代思想の顯現せる天理教と大本教』座右に
奉呈仕候。惟ふに思想問題は國家の興廢に關する重大
性を有し、非常時國難來の原因も此に在るかと思考せら
れ候。御一讀の榮を得ば本懷之に過ぎず候

昭和十一年一月二十五日

内 田 良 平



思想の對立と大本教	三二
天理教の神諭	三四
大本教の神諭	三六
大本教の祝詞	四九
大本教の信條	五三
大本教檢舉問題	五七
無責任なる宗教取締	六一
偏頗なる大本教檢舉	六四
私が此に筆を下す所以	六七
大本教研究の動機	七〇
日本宗主國の問題	七四

(目次終)

時代思想の顯現せる天理教と大本教

黒龍會主幹 内 田 良 平

國民信仰の歸一

私は初め、國民の信仰を 皇祖神に歸一せしめ、億兆一心の内容をして一層充實硬化せしめ、國體の光輝を發揚して全世界の宗主國となり、天が下知ろし召すべき 天皇の御天職を翼賛し奉ることが、日本國民の天職なりと信じましたので、深く考慮を茲に廻らし其の實行計畫を立て、先づ第一着手として神道各派中に於て私共と其の實行を共にし、信仰上より此の大業を成就するに足る教典と、組織、實力、人物との四つのものを具備する教團の有無

を物色したのである。然るに適當の教團を發見することが出來ず失望したのであります。

神道教團と天業翼賛の無資格

總らゆる神道各派の公認せられたるとせられざるとに別なく私の物色しました教團中、二三は有力なるものありて、人格崇高神典の造詣深き先達に指導せられ、惟神皇道の普及に精進しつゝある教團があり、又た教團を成さざるも教化を行へる人格者あれども、世界の各宗教を引き付け、皇道によりて之を陶冶する如き大經綸を有する資格のものはなく、偶ま其の抱負經綸を有する人あるも全く無力にして如何ともすべからず。加之のみならず我が神道家の間には一種の狹量なる惡癖ありて、廣大無邊なる惟神の道を以て自己の智識範圍にのみ解釋し、少しにても異なる他の解釋者あれば直に之を排擠攻撃すること邪教に對するよりも甚だしいものがある。如此にしては我が

國民の信仰を 皇祖神に歸一せしむることも、外に向つて皇道を布教することも出來ないのである。

有力なる天理教

上述の如く神道各派を物色して研究なしたるもの、内に、天理教は組織の鞏固なると實力の大なるとの二條件に於ては他に比肩するものなく、私の求むる處の資格充分なる大教團なれども、祭神、教典、人物の點に至つて失望を禁ぜざるものがあつた。即ち其教義は我が國體國典を無視し、皇祖神を以て單なる造物神と認め、隨つて尊皇は口にすれども、其の精神なく、天皇を以て現人神と認めざるものなれば、天皇の御天職を翼賛し、世界皇化の大業を爲さしむべくもないのであつた。余は茲に考慮する所あり、引き続き他の神道並に各宗教の實情に就き研究を怠らなかつたのである。

政教の不二一體

四

私の研究は大正二年より今日に及びたるものであつて、其の結論として得たるものは政治上に於ける宗教、教育、政治の不二一體なる實相である。現在の政治組織に於て形式的には宗教、教育、政治と分離するも、實際に在つては祭り即ち宗教の信仰が教育思想の根源となり、教育が政治思想の基礎となり、政治が宗教、教育の養源ともなり居れることは、恰も人體内に循環せる血液が頭部に在るも足部にあるも同一血液なるが如く、祭政一致、即ち政教一致の政體こそ正しき政事の原則なることを痛感知得したのである。此の實相を明かにする上に於て、天理教及び大本教の真相を擧げ、兩教團の内容を示すことが千萬言を費すよりも雄辯であると信じます。

天理教と歐米思想

天理教は凡らゆる歐米思想の宗教として實現せるものであつて、人民政治を目的とし、組織は資本主義の金融機構と同じ構成となつて居るのである。即ち彼等は造物主の神を、皇祖神とせず、天皇を現人神と認めず、純然たる天皇機關説を布教して居る。彼等は表看板として、教典の上には敬神章、尊皇章、愛國章以下八章を掲げ間然する處なき惟神の道の如く装へるも、其の内容を検討すれば驚くべきものがある。先づ天理教の神様の成り立ちより擧げますれば次の如くである。

天理教の祭神

天理教の主祭神は最初天の將軍と稱して教祖に神懸りを爲し、天の將軍は月日の神であり、月日の神は元の神、實の神、根の神であり、元の神實の神は天地を創造したる國常立の尊であると托宣して、初めて造物主の神名を名告り、其の國常立の尊が面足の神の出現によつて陰陽となり、八柱の神を得て助手

となし、萬物を生育せらるゝことゝなつて居り、此の國常立の神は陽で月であり、面足の神は陰で日であるとなして居る。之れは實に奇怪なることである。即ち面足の神は神代七代の間に於て國常立神の御神業が大に進捗して伊弉諾、伊弉册二柱の神の出現さるゝ迄に顯現せられました神様であつて、陽神惶根神に對する陰神として出現配遇されて居らるゝのであるが、夫れを引き離して國常立の神とクツ付け、國常立の神を月となし、面足の神を日となすなどは、言語同斷なる國典の破壊である。そのみならず一層奇怪なこととなつて居るのは、國常立の神と面足の神が、萬物創造の補助神として八柱の神を出現せしめられたことである。此の八柱の神は廷喜式にもある宮中神祇官の八神即ち神御産日神、高御産日神、玉積産日神、生産日神、足産日神、大宮賣神、御食津神、事代主神に擬したもので、神様の御神名御本質迄も變更して荒唐無稽の『泥海古記』となし、皇祖神造化の神業を茶番狂言化して居る。單にそれのみならず、神道造化の眞理を示現せられたる八柱神の御神

名御神格を破壊し奉つて居るに至つては我が神道上の重大事である。然るに彼等は『古事記』や『日本書紀』などの書物は人間の作つたものであるが『泥海古記』は神様の云ふたのであるから間違ひないとして、六百萬の信徒に布教して居るのである。

更に又た奇怪なることは十柱の神が出揃はれたる以上、之を統率せらるゝ神がなければならぬ筈である。其の神様は當然天地を創造なさせられた國常立の神でなければならぬ。然るに國常立の神の統率としては人民政治が成り立たぬのである。此に於て國常立の神を十柱の神と同列の神とせられ、十柱の神を總稱して天理王命と申すとなし、天理王の命の主體を教祖たる人間中山みき刀自に持ち來り、教祖を信仰の中心となすべく十柱の神の中より伊弉册の神を引き出し、人類を産み出されたる世界人類の祖神伊弉册の神は、丹波市の此の土地に於て人類の子種九億九萬九千九百九十九人を孕み、大和の國中に産み落されたのであるから、人類發祥の聖地は此處で人間根本の生れ

故郷である。此の因縁と教祖が伊弉册神と因縁ある魂なるにより、神が天降られ教祖を通じて天啓を示されたのであると云ひ、何時の間にか十柱の神の主神は伊弉册の神となり、人間おみき刀自の教祖が代表して主神となつた形である。之によつて見るも天理教が人民政治即ち民主思想の顯現實體化せられた宗教であることが窺はるゝであらふ。

天理教祭神の變更

又た天理教は其の思想に斯くデモクラシー主義をも持つて居るのであるが、彼等は時の潮流を見て變化する用意をも有し、其の根本には確乎たる一定の信念を有するものでなく、主神の神名さへ容易に變更して憚らぬのである。其の主神の名は最初天輪王命と稱したるものが天理王命となつて居り、十柱の神名も表向きの教典は

國常立尊、國狹槌尊、豐斟淳尊、大苦邊尊、面足尊、惶根尊、伊弉諾尊、伊弉册尊、

大日靈尊、月夜見尊

と掲げて居るが、教祖より唱へ來りたる『教義大要』に説明せられて居る十柱の神は、

國常立尊、天にては月様と現はれ給ひ、人體にては眼胷(五體)の潤ひの御守護なし下され、世界にては水一切の御守護をなし下されます。

面足尊、天にては日様と現はれ給ひ、人體にては温みの御守護なし下され、世界にては火一切の御守護をなし下されます。

國狹槌尊、人體にては皮膚接續の御守護をなし下され、世界にては金錢縁談其他一切の關係聯絡の御守護なし下されます。

月讀尊、人體にては骨突張りの御守護をなし下され、世界にては萬有一切の定立支持の御守護をなし下されます。

雲讀尊、人體にては飲食排泄の御守護なし下され、世界にては萬物一切の水氣昇降の御守護をなし下されます。

惶根尊、人體にては呼吸聲音の御守護なし下され、世界にては風音律の御守護をなし下されます。

大食天尊、人體にては出産の時親子の胎縁を切り、出直しの時此の世との縁を切る御守護をなし下され、世界にては萬物一切の切離裁斷の御守護なし下されます。

大苦邊尊、人體にては子を母胎より引き出す御守護をなし下され、世界にては五穀の芽生えを始め萬物一切引き出しの御守護をなし下されます。

伊弉諾尊、人間御創造の時男子の雛型及び種子と成り下され、世界にては萬物の種子一切の御守護をなし下されます。

伊弉册尊、人間御創造の時女子の雛型及び苗代とおなり下され、世界にては萬物の苗代一切の御守護をなし下されます。

とあり、此の内雲讀尊とあるは教典中の豊斟淳尊であらふ。又た教典の方では大食天尊を除き大日靈尊の 天照皇大神様を十柱の神の中に入れて居るが、大食天尊は大食津神とは云へるけれども 天照皇大神なりと云ふのは少し無

理と知つたのか、『教義大要』の方には大食天尊を除かず、神様の差し繰りに行詰つて居る状態である。斯様に天理教が大切なる主神を矢鱈に変更するのは、頗る不可解不可思議の如くなれども、仔細に検討すれば、當然の仕業で不可解とするに足らないことを發見する。如何となれば宗教は國民思想の反映であつて、現在のデモクラシー、世界主義、自由主義、民主々義などの思想に充ちた社會に於て、大多數の人士が何れも定心なく主心なく、所謂主神がないのと同じ事である。即ち現在は時の風潮に伴ひ右往左往する思想混亂の時代なれば、其の混亂せる思想が天理教と云ふ六百萬の教徒を有する大宗教となして居るのである。故に決して天理教主腦部の無知と計り見做すことは出来ないのである。

祭神變更の説明と其の表裏

天理教多數信徒の中には祭神の神名變更や教典と教義の矛盾等に疑念を抱

くものが無いでもないのである。併し乍ら之に對しては彼等にも相當な説明がある。その説明を一々列記すれば長くなるから、天理教の今日を致したる大功勞者として現在教團の實權を握つて居る松村吉太郎氏の講演せる『兩年祭の意義と活動』と云ふ冊子の中より引證せんに、

神様の御思召と地場の先生方の意見と一致せない結果、神様が模様替をして教祖を迎へ取り、道の立て替せられたのであります。斯くて教祖御昇天後の道の様子は一時に立ち替り、翌年に至つて天理教會本部の設立を見るに至つたのであります。そして道は一時に通り易い道と變つたのであります。此處に於て御道は世界應法の理として、完全に世界の理と妥協したのであります。

右應法の理と云ふのは、表面國法を遵奉して行くのであると説明せられて居るけれども、其の實世界の理と妥協したと云ふに至つて明かに世界主義に轉向したことが知らるゝのである。『教典要義』に曰く、

教祖の書き残された神樂歌や、本教の教理が社會の人から茫然として何處が頭やら尾

やら分らぬと非難される以上は、一般の人達に理解の出来るやうにせなければなりません。其所で種々考慮された結果、教典が著作されたのであります(中略)。

以上が教典の製作された理由であります。然らば教典は本教に於て如何なる教義上の地位を有して居るのかと申しますと、教典は天理教と云ふ政府の許可を得た教團に於ては最高の地位を占めて居るのであります。即ち一般の社會の人々から天理教の教義は如何なるものであるかと尋ねられたら、教典を以て是れと答へたら宜しいのであります。然らば神と人との關係に於て成り立つ信仰に於て教典は如何であるかと云ふと、それは云ふ迄もなく神樂歌に一步を譲らねばならぬのであります。故に此の兩者の關係を最もわかるように云へば、對人若しくは對社會の場合に於ては教典は其の表面となるべきものであつて、御神樂歌は其の裏面となるべきものであります。然し神様に對する場合に於ては御神樂歌が表となつて、教典は其の裏面になつて來るのであります。此の兩者の關係を明らかにして居たら、二者を混同する様な事はないのであります。

と説き、『教典』は政府の公認を得る爲め公認教としての飾りに作つたもので

眞の教義は『御神樂歌』にあり『泥海古記』にありとする我が古傳の神道を破壊する教へが今日に在つては六百萬人の信仰として打ち込まれつゝあるのである。而して松村氏が述べた『世界の理と妥協した』とある妥協の片鱗は『教典要義』中に説明して居るが、其の説明は天理教が信徒の財産を搾取する社會の非難に對して辯解したるものであつて、遺憾なく天理教の思想目的を不用意の間に述べて居る。曰く、

天理教を信仰する者に財産を蕩盡する者が多いと云ふ事は、即ち天理教が信徒に對して財産以上の自覺を與へて居る事を意味して居るのであります。故に宗教の本義から考へて見れば、本教は宗教としての使命を全ふして居ると云ふ事が出来るのであります。

更らに歐洲戰亂後に起つて今や世界思潮化せんとして居る露國の過激派の思想の如きは、現在の社會制度に不満を抱き、斯の如き貧富の階級の生ずるのは要するに私有財産を認めて居るからである。私有財産制度を破壊して一切の財産を國有とし、個人は

其の勞働に對する報酬を平等に受くべき者であると主張するのみならず、現に其の實行をして居るのである。世界の一角に斯の如き思想が現れ漸時世界的にならうとして居る所から考へたら、本教の信徒が神の理想の世界を現土に實現せんが爲め、一切の生命財産を奉獻して神と共に働くと云ふ事が、何等の非難を受くべき性質のものでないのである。

以上の文を讀めば、天理教の教典には徹頭徹尾表裏があり、教義の内容にはマルクス共産主義を肯定し、其の思想が天理教に顯現して來てゐることが明らかに認識せらるゝであらふ。

又た天理教の尊皇精神が如何なるものであるかは、其の教典に堂々として掲げられたる『尊皇章』の説明が之れを明かにして居る。左に其の解釋を示さん。

神は萬有を主宰し、皇上は國土を統治す。國土は神の經營し給ふ所、皇上は即ち神裔にして皇上の此の土に君臨し給ふや、實に天神の命に依り、其の生成せる蒼生を愛

育し給ふに在り。

我が天皇が何故尊むべきであるかを明かにするには、先づ神様と天皇との関係を明かにせねばならぬのであります。それで本節では其の関係を説明してあるのであります。即ち神様は萬有を主宰して居られ、皇上即ち天皇は國土即ち國家を統治して居られるのであります。萬有を主宰するとは、必ずしも我が國に存在するもののみを意味して居るのではなく、凡そ宇宙間に存在する者は總て神様の主宰に屬して居るのである。其の點から申しますると、天皇の統治せられて居るのは日本國に限られて居るのでありますから、餘程其の範圍が狭いのであります。然らば國土を統治するとは如何言ふ事であるかと申しますると、其の國土及び人民を支配する事でありませぬ。斯様に天皇と神様とは其の支配の廣狹の相違があるのであります。

然しながら更に考へて見ますると、天皇が國土を支配せられると云ふても、何も天皇が國土を創造せられたのでありませぬ。天皇が建國せられる以前から國土は存在して居るのでありますから、國土は即ち神が創造せられたものであります。然るに天皇が其の國土を統治せられると云ふのは如何なる理由に依るものであるかと申

しますると、天皇が國土を經營せられた所の神様から國土を統治する事を命せられ給ふたから、其の命に依つて支配して居られるのであります。

すれば如何にして天皇が神様から國土統治の大權を得られたのであるかと申しましますると、是れは天皇の御祖先に當らせられる皇孫瓊々杵命が天神即ち天照大神から斯う言ふ神勅を得られたのであります。『豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は吾が子孫の王たるべき地なり。爾、皇孫行きて治むべし。寶祚の隆なるとは當に天壤と共に窮りなかるべし』と。是の神勅に基いて神武天皇始め歴代の天皇が我が國民の上に君として臨ませられたのであります。そして其の天皇の目的は何んであるかと申しますると、それは蒼生即ち臣民を愛し育て給ふ事でありませぬ。此の関係を尙ほ分る様に例を以て申しましたら、會社の様なものであります。會社と云ふものを組織するのは資本主であつて、其の會社を統治して居る者は社長であります。此の場合資本主と社長とが同一人物であることもあれば左様でない時もある。それと同じで國土は神様に依つて經營せられて居るのであるが、其の統治は天皇がせられる事になつて居るのであります。

以上によつて先づ神様と天皇との大體の關係が明かにされたと思はれます。即ち天皇は神の血統を受けて神の命に依つて我が日本を統治せられるのでありますが、昔は天皇の事を現人神と申し上げて居たのであります。故に一は幽界から此の國土を經營し給ひ、一は現世に現れて天皇の位に立ち國民を愛撫し給ふのであります。是れは一寸考へたら二つの異つたものゝ様に思はれますが、其の實同じ神様から現れて居るのであります。

世界の廣き古今國を建つるもの無數にして、其の帝たり王たるもの亦多しと雖も、我が皇室の如く神統を繼承し天佑を保有し、國土綏撫の天職を帯び給へるもの何處にある。即ち知る我皇室は君主中の眞君主にして、寶祚の天壤と共に無窮なる所以を。

前節に於ては天皇と神様との關係を明かにしたのであります。次には本節に於て我が天皇と他國の天皇との相違を明かにして、我が天皇が君主中の君主である事を斷定します。

そこで先づ第一に考へねばならぬ事は、國土を統治して天皇の位にある者は必ずしも日本の天皇のみではありません。現在に於ては多くの國が共和政體、皇帝と言

ふか帝王と言ふか相違はありますが、一國の主權者として見る時は同じ事でありませぬ。故に凡そ國のある所は必ず天皇が一人あつたといふ事は出来るのであります。

これは現在世界に存在する國に天皇のがあると云ふばかりでなく、歴史的に考察して現在其の國は亡國となつて居るが、昔存在して居た國、例へば朝鮮であるとか猶太であるとかいふ國にも、やはり天皇はあつたのであります。故に古今東西に渡つて數へましたら、無數の國があつたのであります。同時に又た其の國を統治する天皇も無數にあつた譯であります。其の多くの天皇と我が日本の天皇と較べましたら、其所に非常な相違があるのであります。

然し其の相違を明かにする前に、等しいと思はれる所から申して置きましょう。それはたとへ各國の天皇が日本の天皇と較べて相違があるとしても、國を統治して居るといふ點からいへば皆な等しいのであります。其の國の成立には區別がありません。其の結果に於ては殆んど同じ權力を國家の上に持つて居るのであります。故に主權者として見たる天皇としては、日本の天皇も各國の天皇も相違が無いのであります。然らば如何なる點に於て相違があるのであるかと申しますと、之れを太

別して三つに分ける事が出来るのであります。其の第一は我が天皇は神統を繼承してお居でになる事、第二は天佑を保有してお居でになる事、第三は我が國土綏撫の天職を帯びてお居でになる事、此の三點が相違のある所であります。

第一の神統を繼承するといふ事は如何いふ事であるかと申しますと、是れは我が日本の天皇は神様の血統を受け繼いで居られると云ふ事でありませう。(以下略す)。

第二の天佑を保有するとは如何言ふ事であるかと申しますと、天佑とは天の助け即ち神様の守護と言ふ事でありまして、保有とは保す有すると云ふ事で、即ち天皇は神様からの特別の守護を御受けになつて居ると云ふ事でありませう。(以下略す)。

第三の國土綏撫の天職とは、日本の國民を安んじ撫でると云ふ事で、一口に言へば人民に安心した生活をせしめると云ふ事を天職即ち天より命せられたる職分とせられて居ると言ふ事であります。(以下略す)。

故に須らく我が皇土は天定の君主なるを確信し、造化生育の恩を神に謝すると同一の至情を以て誠忠を皇室に盡さざる可からず。

天定の君主と云ふのは、神様の御定めになつた君主と言ふ事であります。(中略)。

故に此の確信を得ることが何より大切であります。(以下略す)。

以上の教典の本文丈を一讀すれば非難すべき點なき如くなれども、再讀するに及び此中に伏線の存在することが發見せらるゝであらふ。又た再讀せずとも全教徒に布教されて居る上記の如き解説を見れば純然たる『天皇機關説』であり、尊嚴の冒瀆であり、尊皇章にあらずして冒瀆章となつて居ることが判然するであらふ。

天理教の思想と當局の取締

此の天理教の思想は美濃部博士等が最高學府に於て三十餘年間教授傳播せしめた天皇機關説が反映實現したもので、然かも其の内容は八股の大蛇の如くデモクラシー、自由主義、世界主義、民主主義、共産主義、資本主義等あらゆる歐米の政治經濟思想を採り入れたものであつて、思想的にも政治的にも紛然雜然として歸一する所なく、我國體とは絶対に相容れぬものであること

が知られるのである。

天理教の教義は以上によるも尊嚴冒瀆、共產主義、國體變革の信仰を敢てし居ることは明らかで、之れこそ不敬罪、治安維持法等重大なる法律に觸れて居るものと認められるのである。然るに當局者が永年之れを不問に附して居るのは、恰も美濃部博士等の著書言説が不敬罪、治安維持法其他の犯罪をなして居るに係らず不起訴となつたと同様、自己等と同じ思想の反映なるが爲めに、見れども見へず見へた處が之れを惡し、とせぬと同じ結果である。但し過般の天理教の手入れは目下關西各方面を吹き捲つて居る脱税事件だけに止まるもので、何等教義上に關したものでないことは勿論である。

私が多年研究せる天理教の真相實體を此に發表するに至りました目的は、徒に天理教の缺陷を暴露して之を傷け破滅せしめんとする如き爲めではない。若し左様な企てをなすとしても天理教は直に壞滅するものでない。何となれば天理教の實體は我が國家に於ける特權階級たる政界學界官界言論界

實業界等大多數の人士が抱懷せる思想の實體化せるものであつて、此の特權階級の思想も天理教が各種の矛盾衝突せる思想を天理王の命即ち民主々義に統一せると同じく、今や各種の混雜せる思想を一人格と爲し、自ら知らずして我は共產主義にあらず、世界主義なり。我は民主々義にあらず法治主義なりとか、色々時流に投合する言説をなせるも、實際は反國體思想たる民主々義と云ふ天理王命と同じものになつて居るのである。即ち其の想念が既に天理教に實現して此の大なる教團をなさしめて居るので、天理教を潰すのは特權階級を潰すのと同じく中々容易の事ではないのであります。

天理教の教義と其の轉向

天理教は又た資本主義の金融機構と同一なる組織をなして居る。資本家は貯金、保險、金融、信託等あらゆる名目を以て國民の零細なる資金を汲集し、之を大資本化して事業に投下して居るのであるが、その事業に失敗するも資

本はもとく他人の禪にて相撲を取り居るものなれば、其の損失は結局一般國民に轉嫁せられて國民は實に目も當てられぬ悲境に陥入れらるゝものである。一般國民の不幸は單に之れのみならず、資本主義の金融機構が人體に譬ふれば首より上の頭部即ち資本家丈けに流通せらるゝことゝなつて居り、首から下の四肢胴體には血液の循環なく、金融は全く梗塞され、一般國民は高利を借りて事業を興すと云ふ状態なれば、如何なる有利の事業も高利の前には収益なく、農民も小商工業者も労働者も皆な直接間接に此の資本家等の爲めに殺活の柄を握られ、困弊し切つて居る現状である。

天理教は此の組織を巧みに應用し、信徒に財産を提供せしめて無財産の裸一貫となし、祖先傳來の惡因縁を斷絶し得たりと稱し、之れより神様の御蔭を被ることゝなりたるを以て御道の擴張に勇猛精進せよと激勵するのである。是れ等の信徒は既に教團と離る可からざる境遇に投ぜられ、死物狂ひになつて一路信徒の獲得に努むるより外なく、其の害毒の深刻は遙に資本家の搾取

の如き比にあらず。而して遂に六百萬の大教團となつたのである。

天理教は其の教義に於て尊嚴冒瀆、國體變革の不敬罪、治安維持法に牴觸して居り、到底之れを黙過すべきものにあらざること以上の如きものがあるが、然らば之れを即時禁止解散すべきかといふに、其の罰すべきは罰し禁すべきは禁ずべしとするも、其教團を根本より禁止解散することは考へものである。斯かる膨大なる教團に對し遽かに之れを行ふことは、幾十萬の生活不能者を生じ、其の方途に迷はしむるのみならず、之れを驅つて自暴自棄に陥らしめ、其の結果の國家社會に及ぼす影響甚大なるものあるを以て、之れが對策には自然消滅に陥らしむるか、或は轉向遷善せしむるかとの二途に出でしむるの外なかるべし。而して其の方法としては先づ特權階級に彌漫せる現在の民主的惡思想を一洗し、更に進んで其の惡思想によりて成り立ちたる現行制度法律を改革しなければならぬ。此改革にして行はるれば、其反映として顯現せる天理教の教團は自然に消滅するか、或は轉向するに至るべきは見易き道理で

ある。蓋し天理教は何時にても轉向し得らるゝ準備が豫てよりなされて居る。現在の天理王命は民主的神様なれども、教典の十柱の神に 天照皇大神を編入し、從來の十柱の神と抜き差し出来ぬ爲め、 天照皇大神は張り出し十柱の神の如くなつて居らるゝが故に、之れを轉向改革するには張出しの 天照皇大神を天理王命と申し上げ、 天照皇大神によつて十柱の神々を統一することゝせば、容易に國體に合する宗教となるや明かである。此の時彼等は教祖の豫言せられし如く御道の立て替へになつたと宣言すればよいことになつて居る。

天理教と時代思想の反映

私は以上の内容を知悉せるを以て、既成宗教の害毒を除去せんとするには、爲政者及び特權階級の人々が先づ自分を反省するを急務とするものである。現に天理教が國體に反する祭神を設け、幾多違法の振舞をなしつゝある證據

は上記の如く歴然たるものであつて、彼等の刊行せる圖書にも公然發表して居る。併しながら之等の害悪は獨り天理教のみ敢てせるにあらずして特權階級多數の言説も亦た同様である。美濃部博士等が帝國大學に於て普及したる學説の反國體的なる、其の害毒の甚しき、天理教と毫差ないのにも見ても明らかであらう。

私は大正の初年より國體に關する重大事件の起る度に猛列なる國體擁護運動を起し、幾多の困難と闘ひ其の間には奇禍にも罹つたのであります。其の都度天下の耳目たる新聞雑誌は私共の運動を默殺し、決して之を紙上に報道しなかつたので、其の重大なる國體問題を普く國民一般に知らしむることが出来ず、僅に演説や印刷物によりて其の真相を傳ふるに止まつたが、當時反對者等は『我が金甌無缺の國體はこれしきの事に微動だもするものでない』など、稱し、頻りに運動を妨げた。此の言説は俗耳を惑はせ易きため、私共の運動は常に徹底せしむることが出来ないのを遺憾とした。而して私共が思想

界の悪化に見て平生憂懼せる國體問題は古今未曾有の大事件として勃發した。夫れは虎の門の大逆事件であつた。有史以來我國に於て臣民たるものが未だ嘗て大逆を行ふた例しはない。然るに明治維新の勤王家を祖父とし、父は衆議院議員として亦た勤王の志薄からざる人の子にして此の大逆を企てたるは全く政界學界の混沌たる惡思想に感化せられたる結果にして、國體の危機之れより殆きはないのである。申す迄もなく我が國體は 天皇即ち國體にして其の 天皇に射向ひ奉る大逆者の出現するに至つては、政府當局者たるものは須らく全力を盡して禍根を検討し、抜本的に惡思想を刈除せなければならぬ筈である。然るに政府は勿論特權階級の多數はその聲を潜めて國體の危機を言ふものなく、私共の擁護運動は一部忠誠なる市民の熱狂的賛成を得たに過ぎなかつた。私共は此の時此の不思議なる現象を見て、國體の將來に如何なる變化を生ずべきか、心竊かに憂慮して居たのである。

果せるかな此の大逆事件の發生に對し君側の重臣等が痛く恐怖憂慮して居

る機會に乘じ、『皇室の御安泰を計るには民主的議會政治を確立し、英國の如く 陛下は成る丈け政治に直接せさせられないことゝするのが世界思潮に順應する危險防止の道なり』として、陰に陽に 天皇機關説の實現を企んだのが民政黨の加藤高明内閣であつた。加藤氏は機關説の張本人たる一木喜徳郎氏を推舉して宮内大臣となし、個人主義の普通選舉法を成立せしめ、家族制度を破壊して自黨の目的達成に全力を注いで居たが、幸か不幸か中道にして急死し、若槻禮次郎氏其後を受け、次で濱口内閣の出現に至つて金解禁緊縮政策等に悉く大失敗を招き、倫敦軍縮會議に於て我が國防を危くし、禍根を今日に貽したのである。濱口内閣は斯くの如き失態を重ねたるに拘らず成立の當時より前代未聞の好人氣にて、彼が『兵力量の決定權は内閣にあり』として 天皇の大權迄も干犯し奉りたる行動を敢てして憚らなかつたのであるが、畢竟それも人氣の背景によるもので、人氣の如斯熾んなりしは持權階級の多數の間に民主的政治の希望が漂つて居たゝめである。即ち天皇機關説や其の

他あらゆる學說思想が天理教に反映實現せるのみならず、實際政治にも實行せられ、金匱無缺の國體は寔に岌々乎たる状態となつてゐたのである。

英國人ゼーオービー・ブランドなるものが、前年日本の對支問題を論じ「日本は亞細亞を支配すべきか」と題せる文中に於て左の如く言つて居る。

余は東京にて二十一ヶ條要求時代の外務大臣であつた加藤子爵及び他の有力者に會見し、同一の問題に就き討論する機會を得たことがある。此等の政治家等は何れも政治上に於ける軍部の勢力は已に衰頽期に入つて居ると云ふことを評して居たが、此點には在日外國觀察者も同一の意見を有して居た。更らに日本の政治家等は、高等政治では日本の政府は未だ參謀本部を支配する丈の地位に立つては居ないことを正直に告白すると共に、軍部方面でも從來の遣り口の缺點に自覺し始めて居ることを信すべき理由があると云ふことをも評して居た。

之を見るも加藤高明氏等が大權の干犯は愚ろか、天皇政治を英國の如く變革せんことに努力して居たことが知らるゝのみならず、濱口首相が「兵力量

の決定權は内閣にあり」と云ふたのも、窮餘の言ではなく豫ての計畫に出て居たものなることが知られるのであります。

今や政界思想界の反映は、單に神道の上のみならず、佛教の各宗にも議會主義、政黨主義思想の顯現せるものがあつて道統師傳を重んじ、大徳碩學を中心として傳へられ來りたる法燈の傳統が選舉制となりたる結果、政治選舉の如き醜惡を呈し、一宗の管長を選ぶに黃白を散じて競争の行はるゝなど、言語道斷の状態である。如斯政界の思想組織が宗教々育界に反映せる如く、宗教々育界の受けたる反映思想も其の實體化するに及びては全國民の思想行動となり、互に輪廻して政界を變動せしむるに至りしは、現在の大學教育と法律制度との關係に見ても明かである。故に理想の天國は政教一致して初めて出現することが出来るのであるが、其政教一致の政事など目論見居れば、却つて國體變革の逆賊なり、治安維持法の違反なりと騒がるゝ世の中なれば、眞の國體に立脚したる天國日本の成就是前途容易ならざるものがある。

思想の對立と大本教

現在歐米より舶來せられたる凡らゆる思想が、我が學問となり、政治となり、其れが宗教にも反映して、驚くべき思想の實體化を見るに至つて居るに對し、國體の精華たる日本文化を世界に宣教し、全人類の救済と永遠絶對の平和を建設すべき所謂日本主義の思想は、僅に一部憂國者の間に唱へらるゝのみにて、宗教上には何等の反映を見ず實體化して顯現せられたるものなきは、頗る奇異の感に堪へないのである。然るに此間に於て日本主義の宗教的反映は、一方夙に明治二十三年頃より、丹波の草深き綾部の里に發生しつゝあつたのである。

顧みれば此の現象は維新當初から洪水の如き勢にて汎濫し來つた歐米文化の輸入によりて國魂國風を破壊し、只だ自由思想、民權思想、拜金思想、利己思想、拜外思想の狂信的傾向を生じ、皇國々民の徳本たる忠孝節義の道心

を喪失せしめられ、國體の危機を感ずるに至りたるより、從來日本魂を堅持し來りたる忠誠の志士等が蹶起して明治二十一年前後より日本主義を高唱し歐化主義に對抗したる結果、國民をして自國に目醒めしむる動機を與へ、二十三年教育勅語を下し給ふに及び、日本精神は國民の間に蘇み返り、日清日露の戦争にも勝利を博することが出來たのである。而して此の機運思想の反映が實體化して顯現せられたるものが皇道大本教であつた。

私は此に發見せらるゝ思想對立の新現象こそ等閑視することの出來ない重大問題であると考へた。天理教は教祖の歸幽せられた明治二十年の翌年より神様が御道替へせられたと稱し、時勢に順應すべき人民政治の思想を信仰の基礎となし飛躍の準備に取りかゝつたのである。之に對し大本教は年代を同ふして惟神純皇道を以て全世界を救済すべき日本精神の反映として出現したることは、思想の對立せる世態を如實に示現したるものであつて、輕々に觀過することの出來ない問題である。

天理教の神諭

天理教の御筆先神諭なるものは、誠に平凡なるものにて、之れが神様の御言葉であるかと疑はるゝ程度のものである。併し其の程度のもものが平民的であつて人民政治を出現するバイブルに適して居るのかも知れぬが、今こゝに天理教を知らざる人の爲に天理教の最も大切なる神諭、即ち教典とし祝詞ともなして奉唱する所の御神樂歌なるものを記さん。

御神樂歌

- 一、悪きを拂ふて助け給へ、天理王の命。
- 一、ちよと話し、神のいふこと聞いてくれ。悪きことは言はんでな。この世の地と天とを象つて、夫婦をこしらへ來るでな。これはこの世のはしめだし。
- 二、悪きを拂ふて助けせきこむ、一列すまして甘露臺。
- 一、よろづ世の世界一列見舞せど、胸のわかりたものはない。

- 一、そのはづや、説いて聞かしたことはない。知らぬが無理ではないわいな。
- 一、此の度は神が表へ現はれて、何にか委細を説き聞かす。
- 一、このところ大和の地場の神がたと、言ふて居れども、もと知らぬ。
- 一、このもとを精しく聞いたことならば、いかなものでも戀しなる。
- 一、聞きたくば、尋ね來るなり言ふて聞かす。よろづ委細のもとなるを。
- 一、神が出てなにか委細を説くならば、世界一列勇むなり。
- 一、一列に早く助けを急ぐから、世界の心もいさめかけ。

未だ一つとせし節の如く一から十迄の數へ歌の如きもの澤山あれども省略する。之れを初めて讀む人は吹き出して笑はるゝか、こんな歌に信仰的價値ありや否やと疑はるゝ人もあらんが、笑ふべきものでない。此の御神樂歌の教典は、現在に於ける我が特權階級の多數人が有する歐米思想學問の表現であつて、歐米人の思想學問もこれ位淺薄なるものであるが、之れを信じ、之れによつて飯が食へれば有難いものとなるのである。美濃部博士の機關説や其

他大學教授等の多くが唱へつゝある學說の淺薄なることは、御神樂歌と何等
選ぶ所がないのである。

三六

大本教の神諭

扱て天理教と對立的に出現した大本教の神諭は如何なるものであるか、其
の神諭は二十七年間に涉つて書かれた御筆先なれば、其教が非常に夥しく一
一擧げることが出来ぬので、茲には神諭の大體を窺知するに足る小部分を摘
載することゝした。

大本教の神諭を摘載するに當り此に引用すべき事がある。夫れは十數年前
大本教が檢舉せられ非難攻撃の的となつて居た際、世評を意とせず神諭を研
究し、筐底に秘藏なせしまゝ死去せられた物集高見博士の遺稿中の次の一節
である。

大本教は神示の豫言をもて世を警告し、終始 皇室の藩屏に任じて禍害を未然に防

がんとせるを、此の精神は屢ば世に誤認せられて宗教と同視せられ、甲論乙駁紛々擾
擾の間に呻吟せるは、遺憾の極と謂ふべし。宗教は一身一己の上の事にして、大本の
事々物々國家を念として説く者と異なれり。大本教に鎮魂歸神の法あるは精神の浮動
を控へて信徒の信念を充實ならしめんとするにて、宗教上の作法にはあらず。嗚呼慨
世憂國の人士、本邦は神明首出の國にして萬世一系の帝王いませり。假令禍亂重疊し
て世は伏猪の床となるといへども、決して神明棄てさせ給はず。冀くは同胞諸君、此
に大に反省せられんことを希ふなり。

神諭 御筆 先

明治三十一年正月三日

此の世の立替はなか／＼大謨であるぞよ。日本の人民餘程改心を致さぬと、なか／＼
世界には大變事あるぞよ。神が永らく合戦を致して居るのは、世界の人民を助けたさ
の苦勞であるぞよ。それも知らずに疑うて居るもの、止むを得ず氣の毒な事が出来る
ぞよ。良き心を持ちたが良いぞよ。體主靈従は永うは續かぬぞよ。
此の神は病氣直しの神では無いぞよ。精神直しの神であるから、人民は薩張り精神が
違ふから、神を疑ふのであるぞよ。

三七

三千世界の世の立替であるから、世界の洗濯を致すのであるから、なか／＼大神業であるぞよ。

神に縋りて居る人、改心を致した人は判るぞよ。

今では何も判らねども、見て居じやれよ。何事も判りて来るぞよ。

何事がありても、神や取次を恨めなよ。皆罪業であるぞよ。

太古からの因縁が判る世になるから、餘程皆改心を致さぬと、皆罪穢が出て来るのであるから、此の罪科を償はぬと、思ふ如うには行かぬから、金神か天地の御神様に御詫を致して、御赦しを戴かねば、世界の人民思ふ如うに行かぬぞよ。

世が變れば物事も變るぞよ。

世界にあるものは、皆天地の神の所有であるから、神が守護てやらねば、此の世は人民の自由を致さうと思つても自由にはならぬぞよ。

是からだん／＼世が變るぞよ。

同

明治三十五年六月二十日

出口に明治二十五年に申して在る様に、此の世界に在るものは、人民のもの、様に思

ふて、世界の人民が皆我慾斗りて、強い者勝ちに分け取りに致して居るが、皆天地の所有物であるから、世の立替を致すと申すのは、一旦皆天地へ取り上げて了ふと申して筆先に出してあるぞよ。

同

明治三十六年舊六月四日

變性男子と變性女子も薩張り守護が代りて、坤の金神の守護と成りた御禮やら、又た此の先の日本と露國との大戦争や、世界中の大戦争の御冥助の御願や、色々の深い經綸の御禮の參拜であるから、今度の參拜の御供いたした人に、能く言ひ付けておくぞよ。今度の御供を致してから、心間違ひやら、神の氣勘に叶はぬ事がありたら、誰彼に由らず、是からは酷しき懲戒をいたすから、此心得を胸に離さぬ様に致されよ。

同

大正四年舊四月九日

明治二十五年から今ちや早ちやと申して急き込みて知らした神言が、何も一度に世界中から迫りて来て、一度に開く梅の花、筆先通りに世界が成りて来るから、皆腹帯を確固締めて、腹の中に胸を据えて居らんと、一旦は筆先に出して居る通りが出て来ると、世界中の大戦となるぞよ。愚圖／＼と爲て居りたら、何方の國も潰れるぞよ。向

ふの國は氣が永いから、向ふの國の申す如うに爲て居りたら、日本の國が薩張立たん様になるのを、向ふの國は狙うて居るのぢやぞよ。日本の國は世の根本の肉體の其儘で、末代微軀りとも致さずに居る、天と地との根本の天の御先祖様の御靈統と、地の世界の先祖の御靈統とが數は少ないなれど、根本の御靈統の靈魂が、末代微軀りとも致さん大和魂の御種であるから、數は要らんぞよ。數が何程有りたとして、却りて邪魔になる今の御魂の性來は、日本の此度の二度目の世の立替は、普通の世に出て居れる守護神は、外國所屬であるから、分りは致さんぞよ。日本の國は國も小さいから人民も少ないが、皆外國の方が良いと言ふ如うな、守護神肉體を力に爲て居りたら、途中で、向うへ附いて仕舞から間に合ふ守護神を使ふて埒良う致すぞよ。向ふの申す事を眞實に致して、此處まで自由に爲られて置いて、此上向ふの申す如うにして居りたら、日本の國を好き候らうに爲られるから、天地の先祖の仕組通りを始るから、此の方に皆心魂を任して仕舞うたら良いのだぞよ。肉體で目的を立てるから失敗るのじやぞよ。人民は神の道具に使用のであるから、近頃のお筆先、管長良く見て置いて下されよ。筆先を熟讀て置かんと、トチメンボウ振るぞよ。一度に致すと中々眼も鼻も開かん如

うな事が有るぞよ。世の立替が始まると、人民は良う忍耐らん所があるぞよ。世界中の神業であるから、罪穢の深い所には甚い出來事があるぞよ。延ばす程悪くなる許りであるから、渡る河は渡りて仕舞はねば、眼鼻が附かんぞよ。向うの申す事を眞實にして居りたら、日本の國は慘酷事に爲られるぞよ。日本の國は太元の活神が仕組を爲て居るから、此の方の申す如うに致せば、樂に大峠を越せるなれど、此の方を敵對うて何なりと爲て見よれ、恐い眼に逢ふぞよ。是迄は控えて居りたなれど、此の先は何かの出來事が一度になるから、何に附けても神の方は激しうなるから、敵對い心がありたなら、其場で氣付けを致すぞよ。神は充分に忍耐詰めて來たなれど、時節が參りて來たから、一旦は激しうなるぞよ。敵對さえ爲な何とも無いが、敵對い心が有りたら變るから氣を付けて置くぞよ。毫末でも敵對う心の守護神に使はれて居る肉體は、此の先では間に合はんから、今出る筆先を良く腹に入れて置かんと、平常の事と思つて取損なひを致すなよ。直接の言葉の代りに其の儘の神言を、出口直の手で、國常立尊が言葉の代りに書くのであるぞよ。取損なひを致さん如うにして居らんと、一寸でも混りがあると取違ひが出来るぞよ。最早氣の付け様は無いぞよ。一日ましに此の大本

は氣遣いになるぞよ。氣が緩みたら辛て忍耐れん如うに成るぞよ。世界に順應して此の大本の大化物を顯はせるから、身魂を餘程研かんと忍耐れんぞよ。

同

大正五年舊三月二十八日

大國常立尊變性男子の御魂が、大出口の大神と顯現れて、世界の身魂の洗濯を致すぞよ。

上中下と三段に判別してある身魂を、各自々々に目鼻を着けて、三段の中には、種々の身魂が在るが、それ／＼に名を命けるのが、なか／＼の事業であるぞよ。

外國の方が早う改心が出來やうと言ふことが、早うから筆先で知らして在るが、今では外國の方が比較的良好のやうに在るぞよ。

日本の國の酷たらしいと言ふものは、比例譬言にもならんエグい身魂に成りたもので在るぞよ。九分九厘と一厘とで、勝つか負けるか、此の先き末代の事を規定する大戰ひで在るから、九分九厘は外國の學力なり、一厘の方は神徳の凝りで、餘程の困難で在るなれど、それでも一厘の日本の身魂に養成して、天の大神様に御目に掛けて、天と地との先祖が、元の神世に致すので在るぞよ。

地の先祖が地の世界を経綸ば、此の世は他の御魂では、地の世界の整頓は出來ないので在るから、天のミロク様に直接奉仕の一の番頭二の番頭を、此の身魂と相定めて、他の身魂にそれ／＼の御用を仰せ附ねば成らん、大望な事であるぞよ。

對ふの國の仕組は、日本の國に兵糧が無いやうに成りたら、日本の人民を餌食にしても、後へは引かんと申して居るから、日本の國から神政實施を始めんと、向ふの申す様に仕て居りたら、世の立替も出來ず、じり／＼と身魂が滅滅で、一旦は泥海に成りて了ふが、何も判らん日本の人民が、外國の身魂に成り切りて居るから、是れ丈け世の元の活神が、實地誠を筆先に書いて見せても、自分の身體に火が附いて燃えて來ねば、聞く人民は今に無いぞよ。

聞かな聞く様にして、立替を致さねば、外國の申すことを誠に聞いて居りたら、國が潰れて了ふぞよ。ドチラへ爲た所で、一旦は激烈いから、日本の仕組通りに、一厘の經綸で手の平を覆へして、埒能う立替を致さねば、日本の天真、地徳、發權地の國を奪取て、我意放縱に致す仕組を致して居るぞよ。

同

大正五年舊の九月の五日

世の元の神國の日本の國の、結構な本の教で無いと、誠といふことが、向ふの國には無いから、末代の世は續いて行かんから、今度此の大峠を越すのには、向ふの國の將來が、チヨット混りて居りても除去くぞよ。

毛筋の横巾ほども混りが有ると、其の悪い靈が先に成る程大きいなりて、天經地緯打壞を陰謀て、日本の經綸の大きな邪魔を致すから、今度の二度目の世の立替はコンナ難かしい事は、昔から末代に一度より無い、大望な事で在るぞよ。

日本の經綸を生粹の世に致して、今までの事はすつくり洗ひ替へと致すので在るから、一寸でも混合物が在りたら、其の身魂は日本の國に置かれん規則に定めるぞよ。

日本の國の經綸は、昔から御魂を審査て仕組が致して在るので在るから、日本にはあわては致さんぞよ。

經綸は誰も敵はん經綸が致して有るなれど、日本の人民が日本魂の性來に成りて來んと、今の様な事では日本の人民の守護神が外國の性來で在るから、神が苦しむ斗りて在るぞよ。

九分九厘の身魂が、外國に化りて居るが、せめて半分の身魂が、今度の良めの間に合

ふ身魂に成りて居りて呉れたら、天地の先祖が半分に靈を容れ替へを致したら、日本の國が早う良くなるなれど、立替致したとこで、悪い身魂の洗濯が大變な大望な事で在るぞよ。

身魂の立替立直しは、末代の事で在るから、チツトも容赦は出來ん。待つたは無いぞよ。

嚴しく致すから、神徳を充分受けて居らんと、神徳さへ有りたら、どんな事でも凌げるなれど、今度は神徳を貰うて置かんと辛いぞよ。

此の先きはミロク様と地の先祖とが、一厘の御手傳ひを成さる荒神を御苦勞に成りて、佛事の守護神が九分九厘であるから、日本の一厘との大戦ひで、神力が強いが、負け勝が在るから、勝た方へ従はずぞよ。二度目の世の立替を致したら、土地財物の取り争ひといふやうな事は、モウ致さんから、此世が穩かに成りて、ミロク様の世といふ世は、なした良い世で有るじやろうと申して、皆喜ぶやうに成るから、神徳を頂いて此の境界の大峠を樂に越さして貰ふが結構で有るぞよ。

同

大正八年五月五日

國常立尊變性女子の手に憑りて、日本の人民守護神に氣を附けるぞよ。明治二十五年から出口直の手を借りて、世界の總方様、神々様へ知らした事の實地が迫りて來たぞよ。神と申すものは、蟲一疋でも助けたいのが心願で在るから、第一に天地を經綸致す司宰者として、斯世に生れて來た日本の人民と、世界の守護神に、一日も早く改心致して神心に立返り、善一と筋の行狀を致されよと警告したが、何を申しても粗末な出口直の手と口とで知らず事であるから、誰も誠には聞いては呉れず、狂人じや、山子じや、狐狸じやと申して、相手にするものが無くなりたので、神界の經綸が段々と遍れる斗り、今の世界の此の混亂、是でも黙つて高見から見物いたしてをりて、日本の人民の役が勤まると思ふか。判んと申しても餘りであるぞよ。日本は神國と申すが、神國の人民に神國の因縁が分るものが在るか。是が判る人民なら、此の亂れ切つた世界を餘所の出來事として見る事は出來ない。世界の混亂を治めるのは、天の撰民と生れた日本の守護神、人民の双肩にかゝれる大責任であるぞよ。日本人は神の直系の尊とい御子であるから、此の世界を平らけく安らけく知食し玉ふ、現人神様の御尾前と仕え奉りて、先づ我一身を修め、次に一家を治め、次に郷里を平らかに安らかに治め、

國家に對しては忠良無比の神民となり、祖神を敬拜し、以て神國の神國たる所以を天下に示し、範を垂れ、斯の全地球を平らけく安らけく治め玉ふ、天業を輔翼し奉るは今此の時であるぞよ。それに今の日本の人民は、脚下から烏がたつ迄、袖手で自己主義の行き方を致して、神の申す事は、頭から馬鹿に致して居るから、世界は段々と悪るき事が日に増に殖えて來る斗りで、神からは目を明けて見て居れんから、永くの間變性男子の手と口とで、改心ノと一天張りに申したのでありたぞよ。

同

大正八年六月三日

大國常立尊が永く、出口直靈主命の手を借り言を藉りて、世界の事を知らして置いたが、斯世界は最早斷末魔に近よりて來て、昔からの悪神の仕組が、判然と解る時節に成りて來たぞよ。害國の悪神の頭が永い陰謀で、學と智慧と金と力とで、世界中を自由自在に混亂て來て、今度のやうな大戦争を起して、世界中の人民を困しめ、人民の心を日増しに嶮惡いたして、自己の目的を立てやうと致し、滿五ヶ年の間に、トコトンの陰謀を成就いたす考でありたなれど、只一つ日本の國の日本魂が、悪神の自由に成らぬので、今に種々と手を代え品を代え、目的を立てようと致して、山の谷々まで

も手配りをいたして居るから、一寸の油断も出来ぬ事に成りたぞよ。

同

大正八年八月十一日

日本の神國の御先祖様の道を外れて、外には自由も平和も来るものでないぞよ。日本には、天照大神様の萬古不易の動ぬ神教があるから、此の教を忘れて、向ふの國の惡神の行り方を致したら、到底世界は安神して暮す事は出来ぬから、日本神國の人民は、一人も残らず、天照大神様の御血筋を立て、麻柱の誠を貫いて行かねばならぬ大い天からの責任があるので在るから、國の権力や神の稜威を無視するやうな惡神の計略に懸らぬやうに致して下されよ。

神は靈であるから、人間界の仕事は人間に憑りて致さねば成らぬなり。現今の人民は餘り身魂が曇り切りて居るから、神が憑る事が出来ぬから、一日も早く改心致して、水晶の身魂に研ひて下されよ。天下の危急存亡の秋で在るから、互に小さい感情の衝突は避けて、モチト大きい精神を以て下さらぬと、ビツクリ箱の蓋が開いたら、各自に耻かしく成りて大きな息も出来ぬやうに成るから、今の内に小我を捨て、神我に立直して御用を聞いて下され。神は人民に就いて、互に統一心の無いのを大變に迷惑

いたして居るぞよ。

此の外澤山ある御神諭を通讀するに、神意は世界人類の墮落を慨き、現状のままにては棄て置き難きを以て、世の立て替へ立て直しをなし、日本を宗主國とし天立の我が天皇をして世界を知ろし召さしめ給ふに在ることを明かにして居る。然るに此の天業を翼賛し奉るべき日本國民の魂が西洋文明に幻惑せられ、神の特に授け置かれたる大和魂迄曇らすに至つて居るから、早く水晶の如き心に洗ひ清めさせねば、神の經綸も随つて遅るゝと警告されて居るのである。此の大本教の神諭は我が國民に對し一々痛切なる御告げと見做さるゝのであつて、決して荒唐無稽の神託でないのである。

大本教の祝詞

大本教に於ては神様に奏上する祝詞四種あり。第一は阿波岐原御被ひの祝詞を天津祝詞と稱し、第二は中臣の被ひ即ち大被ひの祝詞を神言と稱し、第

三は大本の祝詞、第四は各家々の祖靈を祭る祝詞にして、此の外祈願の詞、感謝の詞等、幾多のものあれども、信徒をして朝夕神様に奏上せしむるものは四種の祝詞である、其の中『大本の祝詞』は皇道大本教育の教科書となつて居るものである。

祝詞

掛巻も長き大本大御神の宇豆の大前に、慎み敬ひ恐み恐みも白さく、豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は、天地初發之時より、國之常立尊の堅磐に常磐に鎮り居坐して、國の本國浦安國と愛給ひ守賜ひて、何恰に委曲に開給ひし國にしあれば、皇御孫命の天の石位放ち、天の八重雲を伊都の千別に千別て、天降し給ひてより、動く事無く變る事無く、人の心は直く正く、山川は清く潔く、顯見蒼生の食て活くべき稻種は、大御神の大御言以て天の邑君を定給ひ、天の狹田長田に植ゑしめ給ひし稻を、天津御饒の遠御饒と、赤丹の穂に開食詔給ひ授け賜ひて、大地主神は五百津齋鋤を採りて、高田窪田を耕賜ひ、水分神は水を撒かしめ、埴安神は眞埴を肥やし、大歳の神は蝗を

攘ひ、秋の足穂の八束穂の、重穂に成幸給ひ、夏冬の暑さ寒さも和らかに、悪しき疾少く、打見る嶋の崎々、揺見る磯の隅々、常世乃波の重波依來て、生と生き住と住む人の悉、高きも卑きも老も若きも嬉しきも尊み、遠津御神の敷坐す島の八十島は天の壁立極み、國の退立限り、狭き國は廣く峻しき國は平く、青雲の變く極み、白雲の墜居向伏限り、大野原は磐根木根履佐久美、馬の爪の至り留る限り、荷緒結堅めて、長道間無く立續き、青海原は棹舵乾さず、船之舳の至らむ限り、眞舵繁貫き浮並べて、遠近之國の悉、耳驚き眼耀く種々の珍の寶を、霜黒葛來るや來るや、川舟の毛曾呂毛曾呂に持渡來て、百取の机に横山の如く置足はして神皇陛下に獻り、大御國內に敷施こし、學の術に軍の法に、彌益も開け添はりて、實に玉垣之内津御國は、細矛千足之國浦安國と國富榮えて都も鄙も惠良々々に歡ぎ賑はひ、邂逅に禮無く黒き心以て、射向奉る敵在る時は、國民舉り、御祖神の傳へ賜へる、敏心の倭心を振起し、劔の頭取り締り、殿の雄健び踏健び、殿の噴讓を起して、海往かば水漬屍、山往かば草生屍、大君の邊にこそ死なめ、閑には死なじ願は爲じと、彌進に進み、彌逼に逼り、山の尾ごとに追伏せ、河の瀬ごとに追攘ひて、服へ和し、心安く心樂しきは、專我大神

等の廣き厚き大御恵と、齊知り殿知り、細螺の伊這回り、唵喝ふ魚の打仰ぎ、敬禮奉らくを、眞澄の大御鏡の面を押霽して見行し相諾ひ給ひて、天皇の大御壽を、手長の大御壽と、湯津石村の如く、堅磐に常磐に、茂御代の足御代に成幸賜ひ、天津日嗣の高御座は、天地日月と共に動き傾く事無く、生坐す親王等諸王等は、朝日の豊榮登に咲榮えしめ給ひ、官々に仕奉る人等は、本末内外を過たず、茂鋒の中執持ちて大御前の事白さしめ給ひ、飛驒人が打つ墨繩の、唯一道に守るべき、大本の教の憲の隨、善き道の正しき道を、彌遠に彌廣に弘め導かしめ給ひ、男も女も老も若きも、相共に於與豆禮の妖言に鶺鴒の罹る事無く、斯道を慕ひ信ひ、惡しき心を持たしめず、曲れる事を爲さしめず、過ちて犯さむ事は、神直日大直日に見正し聞治し坐し、百姓の天の狭田長田に降て、手脰に水泡搔垂り、向股に泥搔寄せて取作らむ水田種子は、霖雨降頻き河の瀬溢れて、浸し損ふ事無く、暴き風吹荒びて、根掘倒れ朽損ふ事なく、毒しき蟲の生出て喰荒れしめむ事無く、負持てる國の名の、茂瑞穂に稔らしめ給ひ、世の長人世の遠人と名告らひつゝ、千歳萬代生存へて、世の爲人の爲太じき功績を樹てむと欲ふ人々の、病煩はむ事有ば、一日片時も疾く速けく、惟神の靈法に威の御魂

を寄賜ひ、著き驗を効はして忽ち癒えしめ救助けて、己が手手家の業務緩ふ事なく怠る事無く、彌勤めに勤締りて、子孫の八十連五十櫃八桑枝の如く、茂木榮に榮えしめ給ひ、夜の守日の守りに守幸へ賜へと恐み恐みも白す、
 辭別けて白さく、朝に異に身の罪穢を祓ひ清めて拜み仕奉らくを、天の斑駒の耳彌高に聞上賜ひて、宣教師が教の爲に、己が向々有らしめず、其程々の功績を建てしめ賜ひ、殊に是の家内を初めて大本教の教信徒諸人が、家をも身をも護り恵まひ幸賜へと、鹿兒自物膝折伏せ、宇自物頸根突貫きて、恐み恐みも祈願奉らくと白す、

此の祝詞は古傳のあらゆる祝詞を綜合して、文意新らしく、皇道の大本たる敬神尊皇愛人の赤誠を表現し、至れり盡せりの名文である。信徒五十萬人が毎日之を誦じて皇道精神を養へる力は寔に偉大なるものありとせなければならぬ。

大本教の信條

又た大本教の信條なるものは次の如くである。

皇道大本信條

- 第一條 我等は 天之御中主大神が、一靈、四魂、三元、八力の大元靈にして、無限絶對、無始無終に宇宙萬有を創造し給ふ全一大祖神に坐ますことを確信す。
- 第二條 我等は 天照皇大神が全一大祖神の極徳を顯現せられ、八百萬の神達を統率して、遍く六合に照臨し給ふ至尊至貴の大神に坐ますことを確信す。
- 第三條 我等は 皇孫命が 天照皇大神の御神勅に由り、極東の靈域に天壤無窮の寶祚を樹立し給ひ、世界統一の基礎を確立し給へることを確信す。
- 第四條 我等は我 皇上陛下が萬世一系の皇統を繼承せられ、惟神に主、師、親の三徳を具へて、世界を知ろし召さるゝ、至尊至貴の大君に坐ますことを確信す。
- 第五條 我等は丹波國綾部本宮が世界無二の靈地にして、天神地祇の神集ひに集ひ給ひて神律を議定し、古今東西の諸教を歸一して、金甌無缺の皇道を守護し給ふ、地の高天原たることを確信す。
- 第六條 我等は國祖大國常立尊が 天照皇大神の聖旨を奉戴して、世の立替、立直を

遂行し、宇内の秩序安寧を確立し給ふ現世幽界の大守神に坐ますことを確信す。

第七條 我等は豊雲野尊が國祖の大神業を輔佐助成し、率先して至仁至愛の至徳を發揮し給ふ主位の大神に坐ますことを確信す。

第八條 我等は大本教祖が世界獨一の大教親にして、國祖大國常立尊は其肉體に懸り、二十有七年に亘りて至純至貴の大本神諭を降し、皇道の規範を示し給へることを確信す。

第九條 我等は大本神諭の垂示し給ふ清潔、樂天、統一、進展の四大要綱に遵ひ、率先して之が實行を期するは、皇國臣民たるもの、天職たることを確信す。

第十條 我等は各自の肉體が神の容器にして、天地經綸の衝に當るべきものなれば、常に靈主體從の天則に従ひ、以て神政の成就を期すべき使命あることを確信す。

第十一條 我等は日夜鎮魂歸神の神法を修業して、心身の邪氣を拂拭し、天賦の眞心に復る時は、生き乍ら尊き神格を具へ、天地に代るべき大功を永遠無窮に樹立し得べきものたることを確信す。

第十二條 我等は各地に配置せられたる産土神を、各人に賦與せられたる守護神との

保護指導によりて、心身の健全を保有し、又祈願の透徹を期し得ることを確信す。
第十三條 我等は身心正しければ神助天恵に浴し、心身不正なれば神罰天譴に觸れ、
現世幽界の別なく、嚴格に神律に照らさるゝ時代の正に到達せる事を確信す。

尙ほ大本教は惟神の皇道を普く世界に布教するため、最も必要なる語學の習得を怠らず、老も若きも世界の通用語たる 에스ペラントを學び、 에스ペラントにて雜誌を發行し、歐米諸國に向つて惟神の道を擴め、今や外國人にして大本教の信仰者たり、信仰者たらざるも光は東方よりの豫言を確信するに至りしもの尠なからず、更に宣傳使を派遣して益々布教に努め、驚くべき成績を示して居る。現に中華民國に於ける紅十字教と提携して、精神的結合をなしたる如き、其の他幾多の宗教と交渉を保ち、徐々として惟神の道を了解せしめ、尙ほ愛善運動を起して皇道の一つに陶冶せんと計畫せるなど、其の事業は天理教の海外布教と同日のものではない。蓋し天理教の海外布教は在留同胞を目的とせるものであつて、歐米人を教化せんとするものではなく、之

れを教化せんとしても教化し得らるゝものでないことは、大本教と全然其の本質を異にして居るのである。

大本教の内容に就て記述すべき材料は尙ほ多々なるも、概要のみ舉示するに止めたるは、大本教の出現が純然たる神政復古思想、即ち明治維新の皇謨たりし世界經綸の大日本宗主國を出現せんとする大精神の反映顯現したるものなることを立證すれば足るからである。従つて世人をして大本教を理解せしむべき詳細なる資料に至つては省略することゝした。

大本教檢舉問題

上述の如く大本教は敬神尊皇愛人の皇道を實行し、天業を翼賛することに献身して居る教團であるに係らず、前にも不敬事件に問はれ、今回又た不敬罪及び治安維持法に觸るゝものありとして檢舉せられたるは、實に不可解不可思議と云はなければならぬ。然るに翻つて思考すれば、檢舉の不可思議に

あらずして寧ろ當然とすべき原因あるを發見することが出來ると同時に、天下の大危機も此の間に伏在することを認め得るのである。

大本教が檢舉せらるゝ原因の第一は、日本主義者等の勢力微弱なるに加へ、一致團結する能はざる心境の現はれたるものであつて、神道家國學者など惟神の教を持ち傳へたる人々は、千數百年間佛教徒に壓迫せられ來りたる結果、自然繼子根性となり、天空海濶なる神教をして却つて排他的内訌的ならしめ、少しも包容の雅量なきこと今尙ほ昔しの如く、大本教が己れ等の分靈分身の集團なることに思ひ及はず、平生之を目するに淫祠邪教を以てし、檢舉の事あるや快哉を叫び、筆舌を揃へて攻撃して居るのである。かゝる状態なれば、大本教が其の善惡に關せず檢舉せらるゝに至りしは、當然のことゝせなければなるまい。

第二の原因は反對思想の重圍に陥り、孤立無援、恰も楠木正成が七百の小勢を以て足利十萬の軍と戦ひ討死されたと同様の觀がある。現在の特權階級

即ち官僚界、政黨界、學界、實業界、宗教界の人々の大部分が民政思想であることは、天理教に顯現せる實體を見て明かである。此の多數者より憎惡反對を受けたる大本教こそ、彼等に取りては危険至極の存在にして、遂に破壊せらるゝに至るべきは當然の歸決であらう。

第三の原因は、政府當局者が宗教の信仰心理に對し全く無理解なることである。何れの宗教たるを問はず、其の信仰者には三種別があるのである。正信者、迷信者、僞信者之れなり。正信者は神なり佛なりに接し、心境の平和を開拓し、人格を向上せしめ、公私の職業生活上にも裨益せんとするものである。迷信者は精神上、肉體上、或は物質上に苦悶する處ありて、其の苦悶を醫すべく神佛にすがりたる者なれば、信仰に入りたる當初は心境の變化により種々なる靈異的現象を認め、狂信者となるものあり、迷信者となるものがあるのである。狂信者は時日を経るに従つて正信者となるものが多いが、迷信に入りたるものは容易に迷蒙より自覺せず、正信仰に達せしむるには、

超人的教主の人格と誠實なる指導によらなければならぬ。而して此の迷信者は荒唐無稽の神祕を語り、或は神諭教義等を自己の迷信的に解釋し宣傳するものがある。之等の言動を一々法律的に取扱ふ時は、其の末節に於ては不敬罪もあらん、治安維持法に牴觸することもあらん。然るに之等の違法が一々教團全部の責任となり、教主等主腦者の連帶責任とならば、何れの宗教も存立することは出来ないのである。現宗教の内に於て、迷信者の多いことは何れも負けず劣らずであるが、大本教の最も不利なる點は、『惟神の皇道は敬神尊皇、祭政一致の政、即ち神政復古に在りて宗教にあらず』とする處に政治的思想を充分に加味して居る爲め、蒙昧なる迷信者等が、宣傳中に或は私談に、常識を逸したる言行あるべきは、推察に難からず。之れ恐らくは大本教の檢舉せられるに至つた直接の原因ではないかと察せられる。

元來宗教なるものは、狂信者迷信者の多數集合し來る時に大發展するものであつて、夫れ等の徒が正信仰に入り減少して行く程、活氣を失ひ發展力を

失ふものである。天理教が狂信者迷信者より財産を捲き上げ、之等を驅つて教勢を擴張したる如く、大本教も亦た狂信者迷信者を宣傳使とし、教團の發展を計りたるは疑ふべからざる事實と認めらるゝのである。之等迷信者の言行を以て、個人的處罰に止めず、教團全部の責任として處罰せらるゝに於ては、宗教々團なるものは一として存在することが出来ぬことゝなるであらう。之れ私が政府當局者の宗教に對する信仰心理に理解を持たないと云ふ所以であります。

無責任なる宗教取締

歴代政府當局者は既に信仰心理を理解せざるのみならず、其取締上の無責任なる結果に生じたる姪祠邪教を放任して唯だ弊害の甚だしきを認むるか、或は自己の政權を維持する上に不利を感じる如き場合にのみ其の彈壓取締りを行使して憚らなかつたのである。如此行爲が何故に行はれたか、其の原因

を検討すれば、歴代政府は神祇並に宗教に關する國策に對し、全く無關心無法規に委せて居た爲めに外ならぬのである。

政府當局者は神祇宗教に對し斯く無關心なりしたため、正神正教と姪祠邪教との定義をも法規の上に明示せず、如何なるものが正神邪教なるか、或は姪祠邪教なるか、一切國民をして知るによしなからしめ、僅に不充分なる警察犯處罰令の如きものを以て取締る結果として、無理無法なる行爲も此の間に發生し、或は迷信を縦まにせしめ、純眞なる信仰を阻害せしむるが如きことを敢てして居るのである。若し現在の儘にして放棄せられたならば、時代思想の表現せらるゝ宗教、宗教思想の反響を被る政治界の思想は、何處迄墮落して行くべきか、寔に憂慮に堪へない問題である。

抑も明治維新の理想であつた神政復古祭政一致の經綸は、神佛混合を禁じ、排佛毀釋を行ひ、神祇官を復興し、千餘年來佛教徒に奪はれたる神社を獨立せしむるにあつて着々實現の運びとなりつゝ、ありしも、間もなく歐化主義の

襲來によりて其の經綸は明治五六年の頃に至り忽ち阻絶し、國典神教など顧みるものなきと同時に、佛教も亦た排佛毀釋のまゝに放棄せられ、國民をして傳統的精神の歸趨を失はしめ、國體の精華、教育の淵源たる敬神崇祖の國民的信仰上に大動搖を生じ、姪祠邪教を簇生せしめ、正邪の辨別すら至難なる状態となつて居る。

政府當局者よ、萬物の靈長たる人間が動物靈の狐狸などを祭つて信仰して居るのを何んと見られて居るか、之等が姪祠であるまいか。陰陽の交接を以て歡喜の極なりとして祭祠せる佛教中の聖天さんの如きは何であるか。我が祖神にも參拜せしめざる基督教の如きは抑も何であるか。言ふ迄もなく姪祠邪教とは國體に反するか、或は國魂國風を破壊するものでなければならぬ。信仰の自由は憲法の保障する所なりとは言へ、それには自から限度がある。之等の正邪を甄別せずして宗教廓清の名の下に妄りに其の取締りを二三にするは、蓋し國民信仰を混亂せしめ、延いて國家に重大なる危険を招來するも

のである。

況んや歴代の政府者は、惟神の道を教へず祖神を禮拜する作法も詞も教へず、國民は教へられざるを以て思ひくゝの作法祈願をなし、甚だしきに至つては拍手を打ち神靈を招き奉りながら何事も言はずして引き退る不敬をもなして居る。かゝる状態にある現在に於て、文部大臣が國體明徴の聲に餘儀なくせられ、敬神崇祖を唱へ出したるは滑稽至極である。皇國民たるものは、君が代の國歌を奉唱する如く祖神の恩澤を感謝する一定した祝詞がなければならぬ。此の祝詞と國歌を神と君とに奏し奉ること、即ち祭政一致の根源である。神政復古の第一段である。世界の宗主國となる第一歩である。祝詞には箇様に重大なる意義あることも、法律萬能を唯一の信條とする官僚や民政思想の特権階級者等には、恐らく理解することさへ出来ぬであらう。

偏頗なる大本教檢舉

現在我邦に於て姪祠邪教盛に起り、國民の思想は歐米の唯物主義個人主義に混亂せしめられ、皇道他人なしとして教へられ組織せられたる大家族制度迄も破壊され、品性道義日々に下落し、思想國難、政治國難の現狀を發生して居るのは、畢竟歴代の政府者が國民精神の基本たる敬神崇祖の涵養を閑却したることによるのである。歴代内閣の繼承たる現政府當局者たるもの、此の混亂せる思想を善導するには、先づ姪祠の種類及び邪教の定義を闡明し、國民をして姪祠邪教と眞神正教との區別を明かに認識せしめ、而る後姪祠邪教の徹底的掃除に着手せなければならぬ。然るを政府當局者は此急務を閑却して突如皇道大本教を檢舉し之れを取り潰さんとするもの、如きは、事の大小輕重を量らず正邪をも識別せざる行動と言はなければならぬ。縱令大本教にして私の信ずるが如き明治維新の皇謨を反映し日本精神を顯現せるものでなく、當局者の見るが如き許すべからざる犯罪があるとしても、大本の犯罪以上顯著なる不敬不穩なる法律違反の行動を敢てして居る天理教に對し、唯

だ單に脱税問題を以て三四の幹部を檢舉したるに止まり、其の教義に關しては全然不問に附して居るのは抑も何が故であるか。天理教は前に述べたる如く、民政思想天皇機關説の權化であつて、現在に於ける特權階級者の學び來つた學問と思想とを同じふする爲に不問に附せられて居るのであるまいかとの疑惑に對し、當局は果して何んの辯解の辭かある。加之のみならず大本教の信徒は僅かに五十萬内外に過ぎず、而して天理教の信徒は六百萬に達する大衆を有し、其の教師等が、土地國有説や共產主義、天皇機關説などを臆面もなく信徒に説き聞かせ、其の講義録が教會より堂々と發賣頒布されて居るのである。それは私が前に引用したる『尊皇章』の解釋丈けに見るも明かに認めらるゝのであらう。斯くの如く天理教は大本教に比すれば十數倍の範圍に害毒を流し危険思想を培養して居るのである。然るに政府當局は此の不逞なる天理教を問はずして獨り大本教のみを嚴處せんとするのは寔に偏頗至極と言はねばならぬ。之れ私が當局者に正邪と大小輕重とを辨別する能力なしとする所以である。

私は斷言する。當局者にして既に大本教を檢舉したる以上、天理教に對しても必らず之れを檢舉せなければなるまい。天理教を檢舉すると同時に、美濃部博士を初め帝國大學の反國體思想を教授したる人々も亦た悉く檢舉せなければならぬと。如何となれば天理教に於て危険思想を遠慮なく布教し初めたるは、同教幹部の子弟が帝大を卒業して歸り、教職に就きしよりのことであつて、美濃部博士等より教へられたる學説と、天理教本來の民政主義と一致して茲に反國體の危険思想を六百萬人の信徒に流布することになつたからである。政府當局たる者、果して能く天理教及び大學の不逞分子を徹底的に檢舉し得るや否や。

私が此に筆を下す所以

私が茲に天理教、大本教の真相を記述せし所以のものは、此度大本教が大

々的に檢舉せられ、世間一般より總攻撃的に非難せられ居るに對し、徒らに庇護辯解を試みんとするためではない。大本教が早晚大弾壓を被り取り潰さるゝに至るべきは前にも陳べて置いた通り、三大原因の伏在するありて到底免かる可からざる運命に在りしことは明かなる處であつて、今更ら庇護も辯解も何の役に立つものでない。大本教の幹部は豫て今日あるを知り、信徒等も『三千世界の梅の花、一度に開く神の教、開いて散りて實を結ぶ』とある宣傳歌の實現が近づきしと、昨年の初め頃より語り合ひ居たるを以て、縦令一時は取り潰さるゝとも、聽ては其の實を結びて神政成就の時機到來すべしと確信せるものゝ如くなれば、彼等は今回の大檢舉に遭逢するも、豫ねての覺悟なりとて之れが爲めに少しも騒ぎ立てず、靜かに時期の到來するを待つて居る様子である。而して其の教主や幹部等も大本の教團の解散に對しては是れ亦た必らずしも大した遺憾とせられまいと思ふ。彼等は既に三十餘年間皇道の大本を布教し五十萬人の信徒を得て、之れに敬神尊皇愛人の精神を打ち込

み、日本の天職たる世界經綸の大業にも手を著け、雛型丈けは確かに成就せしめたるものなるが故に、其の教團にして解散され或は建造物にして取り潰さるゝに至るも、其の精神は永遠に滅せず、他日天業達成の上に貢献すること少なからざるべきは、之れを建武中興の兒島高德にも比すべきであらう。高德力微にして、天皇に報ひ奉ること能はざりしも、櫻樹に題せし十字の表忠精神は千載の下尙ほ凛乎として残つて居るのである。

故に大本教々團檢舉事件には吾々の容喙すべきことにあらず、又た教團が解散せらるゝに至るも傍觀するの外致し方なきことなるが、此に默視することの出来ない問題は、時代思想の宗教界に反映せる現状を見るに、民政主義反國體の思想が、獨り天理教のみならず神道各派佛教各宗の間にも充滿せる一事である。日本主義皇道思想の顯現たりし大本教は既に破壊の運命に陥り、在郷軍人及び一部有志の國體明徴運動は其の外見優勢なるが如きも、其の實勢力に於ては反對者の十對一に過ぎず、聽て選總舉の結果民政主義の勢力一

齊に擡頭し來るに至らば、機關説の逆戻りは言ふ迄もなく、日本主義者、國體明徴運動の有志も亦た大本教と運命を同じうするなきやである。之れ病中朦朧たる精神を勵まし筆を執りて恐るべき思想界の現状を起述し、辱知諸君の參考に供すると共に非常對策を講ぜられんことを切望する次第である。

大本教研究の動機

私は大本教研究に着手してより未だ十餘年にしかならない。大本の名は歐洲戰爭頃から聞いて居たが、天理教と大同小異の宗教ならんと思ひ、初めは内容を覗いて見る氣にもならなかつたが、偶ま親友故花井卓藏博士と閑談の際、博士が大本事件の辯護士であつたを思ひ浮べ、『大本教は如何なるものか出口王仁三郎とは如何なる人物なりや』と質問せし處、『大本教の如何なるものなるやは斷言する丈けの確信的知識を有せざるも、大本教の行動が法律上眞に犯罪を構成して居たか否やは疑問で、興味ある問題であつた。なぜなれば

出口の不敬罪は自ら不敬罪を犯して居るものは何にもない。御筆先とか又た信徒等が書きしものとかに對し認定によりては不敬になると思はるゝものがあつた。然るに之れを悉く出口に背負はするは無理であるに關らず、出口が背負はなければならぬことになつたのである。出口の人物は其處に面白い點が發見さるゝとゝもに、利口か馬鹿か見當の付かぬ男とも見らるゝのである。併し宗教家として見れば實に偉い信仰を持つた者と認めねばなるまい。出口が檢舉せられて警察官、檢事、豫審判事等より累次の取調べを受くるや、其の訊問は一々出口の不利であり辯解の途は幾くだけでも立つ事であるに係はらず、彼は『左様で御座ります〜』と悉く肯定して仕舞ふた。於此法律上不確實なる證據材料が正確なものとなり、有罪疑ひないことゝなつたのである。何んでこんな不利な訊問に對し一言の辯解もせず承認したのかと尋ねたら『辯解すればとて聞き入るゝものでなく、唯だ事件が永引くばかりなれば、早く役人の言ふ通りになれと神様から教へられ、何もかも承認したのである』

と言へり。之れは一寸普通人の出来ぬことで、訊問事項を承認すれば有罪となるべきは法律知識のないものでも明かに知らるゝのである。夫れに關らず目前の利害を棄て、神託に服従した處に、出口の宗教家として如何に強き信仰信念を持つて居るかと云ふ事が認められるのである。斯様な事情にて出口は神様任せて至極呑氣であるが、我々辯護人としては其儘見殺しにする譯にも行かず、遂に精神鑑定迄持ち出した譯である』と簡明なる話を博士より聞かされ、大本教は世間に喧傳する如き姪祠邪教にあらず、出口王仁三郎なる人物も非凡らしく思はるゝを以て、大本研究に着手すべく機會を待つて居る折柄、明治二十七年朝鮮に蜂起した東學黨軍を赴援した際の天佑俠同志の一人大崎正吉君が、大本教の信者となつて居たるにより、同君から其の内容を聞き、大本の目的が私の目的たる天業翼賛と一致するものあるを知りて大に喜び、以來大本教に關する文書を通讀し、茲に大本教の實體を認めることが出来る様になつたのである。

大正十四年一月、葛生能久川崎紫山君等と大崎君の案内にて綾部なる大本教の本部に出口氏を訪ひ、爾來互に往來して交情を重ねるに従ひ、大本教天業奉仕の經綸、就中外國に對する布教の如き、全然吾人の目的と一致なし居るのみならず、大本教の愛善運動にあらざれば、他の政治的思想團體に於て外人教化の事業を爲すことは、誤解を招き破綻を生ずる憂あるを以て、黒龍會が今日迄世界各國に向つて皇道精神を了解せしむべく苦心施設したる各種外國團體の如きは、擧げて大本の愛善運動に合流せしむべく期待して居たのであつた。然るに今回大本教の檢舉事件起り、彼等の愛善運動は根底より覆されんとするに至り、皇道の對外宣教は依然黒龍會單獨の事業として残さるゝ事となつた。黒龍會は今後尙ほ孤軍奮闘を繼續すること勿論であるが、力微にして事業が餘りに大きい爲めに、其の前途に於て完成の時機を失するなからんやを恐れて居る。若し米國などの如く富豪の徒にして天業達成に自覺する者あらば、皇道傳道會社の如きを組織し、黒龍會の事業を援助するか、或は會

社直接の傳道に當るべきである。然らば黒龍會の施設事業は擧げて會社に譲り其の達成を期せしむることが出來ると信ずる。

七四

日本宗主國の問題

本文の最後に於て聊か説明を試みたきは、天業の目的たる日本宗主國の問題である。歐化せる日本人等は我々の天業宣布の目的を以て『頑迷なる日本主義者が飛んでもなき誇大妄想的な言を吐き、外國をして日本を侵略國なるかの如く誤解せしむるも之が爲めて洵に困つたものなり』と擧斥しつゝあり。此の反對説は殆ど言論界を通じての意向であり、特權階級多數の意見でもあると認められる。併しながら之等の人々は眼界小にして認識不足に陥つて居るのである。日本宗主國問題は日本人ばかりが企圖して居る問題でなく、世界の宿題となつて居るのである。然るに其の時機未だ到らざるため、眞に人類の平和を熱望して居る學者政治家等も苟かに研究して時機の到來を待望

して居るのである。現に我が維新の志士にして國學者であつた丸山作樂氏が、世界の碩學と仰がれた埃國のスタイン氏を訪問した時『日本は萬世一系の皇統にて世界に珍らしき國と云ふことを聞き及んで居るが、何か其の證據となるものが存在し居るや如何』と問はれたので、丸山氏は之れに對し直に『三種の神器あり』と答へたるに、『其の神器は後世の作物にあらずや』と反問され、『日本人如何に愚なりと雖も、數千年來僞瞞せらるべきにあらず。現に靈鏡は約二千年前宮中より移され、伊勢の神宮に太廟として奉祭し、寶劍は熱田の神宮に奉祭せられ、神璽は 天皇の大御許に在りて歷代に繼承傳授せらるゝこと千古變る事はない』と言ひしに、スタイン氏感嘆して曰く『世界萬國何れの民たりとも自己の幸福を願はぬものはない。然るに人世不幸中の大不幸は戰爭である。故に吾輩等學術政治に志す者は、常に世界に戰爭の起らぬことを希望して居る。夫れは世界萬國を統御すべき宗國を建て、志ある各國之を輔佐し、互に國境人民を相侵さざる大憲法を制定し、若し之に背く國あらば

七五

他の諸國擧げて之を征するに至らざれば、其事は行はれざるなり。是に因つて西洋各國を通觀するに、孰も開闢以來寶器ある事なし。寶器なき同等の國を立て、宗主國と爲したればとて、他國人民の服従すべきにあらず。日本は小國なれども天子は天神の裔にて、開闢以來の神器を有ち給ひ。萬世一系の皇統を奉戴して、全國人民が君臣の大義を紊さぬとは、いかにも珍らしき國柄なれば、必ず證據となるものあらんと思ひ、貴國人に遇へば必ず此の事を質問せしに、何れも「我が國は未開野蠻にてさる物あることなし。唯だ萬世一系の皇統あるのみ。其他語るに足るものなし」との答へばかりにて甚だ失望し居たるに、今日始めて詳説を聞き大に平生の望を達したり。此の事歐米各國の人民聞き傳へて知ることゝなりたらんには、必ずや貴國をして宗主國たらしむるに至らん」と言へりと。スタイン氏の説は實に卓見にして、其の後此の變形的に出來たのが國際聯盟である。併しながら其の聯盟は、スタイン氏の言へる如く同等の各國代表が集つたのであるから、何事も出來ないのは

當然である。畢竟世界の眞の平和を期するには、聽て日本宗主國説に進んで行かねばならぬ事と信ずる。

前年、世界戦争の頃佛國の博士ポール・リシャール氏日本に來り永らく東京に滞在して居らるゝ中、私共に向ひ『日出の國にして萬世一系の 天皇あり。開闢以來一度も異國の征服を受けず。神器の御教に至つては、世界のあらゆる教訓も之に及ばず。國體の組織は共和制、立憲君主制、共產主義、社會主義等の及ぶ處にあらず。獨逸の國家主義の如き、日本の 天皇主義と比較すべきものにあらず。天皇主義は獨逸の侵略的國家主義とは全然異なるものあるに係らず、世界列國より同視され誤解され居るは、日本國民の罪なり。早く天皇主義を闡明して世界の宗主國となり、世界永遠の平和を建設しないのであるか。夫れが出來なければ切めては亞細亞丈けなりと 天皇主義の下に統一しては如何』と言はれたるには一驚を喫したのである。リシャール氏は黒龍會より英文雜誌エシアン・レビューを發行して日本精神を世界に宣傳せる

際、顧問となり大に助力して下さつた人であつた。爾來大本教愛善運動の歐米進出と黒龍會の地下運動とは相待つて、天皇主義即ち惟神の皇道をして益々外國人の間に了解せしめ、光は東方よりの豫言も日本を宗主國たらしむる思想の實行上に顯現すべき形勢を誘致して居たのであつた。惜哉大本教の厄難、私の病患、天運未だ熟せないのであるか。否乎。

(昭和十一年一月二日執筆、同廿四日脱稿)

終

昭和十一年二月十六日印刷
昭和十一年二月二十日發行

發行人

東京市麹町區
二ノ田八六

鈴木一郎

印刷所

東京市
芝區新橋
二ノ田八六

安久社

發行所

東京市麹町區
二ノ田八六

龍會

43